科目区分，授業科目名　教育本質論
担当教員：二宮　衆一

他者と学び合う授業づくり

学校教育・二宮　衆一

１．授業の概要

本年度、前期の教育本質論では、第１回から９回までを課題図書の講読に、第１０回から１４回までを課題型グループワークにあてた。前半の講読については、課題図書として指定した藤田英典『義務教育を問い直す』、市川伸一『学力低下論争』、佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』を利用しながら授業を行った。授業の流れは以下の通りである。

①事前に予習箇所を指示する。
②授業では、その予習箇所から問題を出題する。問題は、基本問題と応用問題とに分け出題。前者では語句説明や概念理解を、後者では論争となっている事項やレポート課題等を出題した。
③基本問題の例は「学校選択制推進論者たちが、学校選択制の利点として示すものを２つ挙げなさい」「学力低下の原因を和田秀樹は何と指摘しているか」などである。こうした問題をグループの中で話し合わせることで、学生たち自らが、わからない点を聞き合ったり、教えあったりすることをねらった。そして、その過程で課題図書の内容理解を深めることを目指した。
④応用問題としては、「授業時数の増加や受験プレッシャーの復活は学力向上のための対策として有効と考えられるか」といった問題を出題し、グループの中で話し合いをさせたり、「学校選択制や習熟度別指導など学校教育の複線化は、個に応じた教育の提供か、それとも格差や差別を生み出す教育なのか、どちらでしょう」といったレポート課題などを出した。

後半の課題型グループワークでは、学校づくりや授業など、現場のビデオ（伊那小学校、土堂小学校、筑波大学付属中学校、NHK のわくわく授業など）を見せ、その比較をさせた。また、伊那小学校と土堂小学校については後述するようなインタビュー記事の作成にも挑ませた。

２．アンケートの概要

試験を行った際、学生に無記名式の授業アンケートを配布し、協力をお願いした。実施したアンケート項目については、以下の通りである。

１．事前に本を読んでき、質問されたことについて四人グループで協同学習するやり方はどうでしたか。意見を聞かせて下さい。

２．後半に行った授業（①伊那小学校と土堂小学校の比較、②認知再生実験を通しての学習理論、③浮力の授業・バネと力の授業・立体図形の授業の比較検討、④インタビュー記事の作成と相互評価）についての感想・意見を聞かせて下さい。
①この中でつまらなかった・学ぶことがなかった授業がありますか？あればどの授業がそうだったか、またその理由を教えて下さい。②この中で教育を考える上で役に立った・学ぶことがあった授業はありますか？あればどの授業がそうだったか、またその理由を教えて下さい」。

「３．その他に何か、アドバイス等があれば記入して下さい」。

アンケート回収数は５１であった。

３．授業の自己評価

①アンケート項目１について

本年度、試行した課題図書の講読については、４５人が以下の抜粋にあるような肯定的な評価を書いていた。「４人で話し合うことで、自分と同じ意見、違う人たちと討論できたので良かっ

た」「周囲と協力して行うことで視野が広くなりました」「自分の意見を言うことが苦手なので、結構しんどかったです。でも自分とは正反対の意見を聞いたりすることができて、考えが広がりました」「自分と同じ意見、違う意見があったり、自分が気づかなかったところを教え合ったりでき、考え方の幅が広がるやり方だったと思います」。

しかしながら、学生達はこうした肯定的な評価を行う一方で、以下のような問題点も指摘している。「本を読むこと自体、大学に入って少なくなっていたのですごく良い機会になりました。ただ、本を読んでいない人がけっこういたので協同学習がすすまないときもありました」「ある程度の予習が必要であり、習慣的に学習し、それを４人で共有し合ったりするのはよいと思いました。ただし、グループのそれぞれが意欲をもってしなければ、負担が偏ったりすることも考えられます」。

こうした予習の問題は予想されていたことである。そのため授業中、折に触れて、必ず予習すること、また予習をしてこなかった場合、他のメンバーの迷惑になることを繰り返し伝えたのであるが、それだけでは効果が薄かったようである。この点は何らかの工夫を行う必要があると考えられる。予習の有無をチェックし、評価対象とするというような管理的手法をとるのではなく、できるだけ学生の自発性や意欲を喚起することで予習に結びつける手法をとりたいと考える。なぜなら、一部の学生からは「いつも他の人の意見や考えを知ることができて良かったし、一人が本を読んでこなかったら、他の人の負担になるので責任感が持てる」という意見があがっているからである。この学生は、おそらく共に学び合いながら、新しい知識を得る喜びを経験したからこそ、こうした「責任感」を感じるようになったと考えられる。そうした経験を味わうことのできる授業を創りだしたい。

この他にも「４人グループで討論するということは、お互いが協力して一つの答えを導き出そうと努力することができたので良かった。しかし、本を読むことがその場だけの暗記になってしまい、理解したようでもすぐに頭から抜けてしまったと思う」というような意見もあった。この意見が示すように、学生の知識内容の理解という面では、今回の授業は課題が残った。「覚える」のではなく、「理解する」「わかる」ということを保障する授業になっていなかったのかもしれない（この点はテストの答案からもそうした印象を受けた）。多くの知識や問題を扱うのではなく、繰り返し同じ知識や問題を扱うこと、そして、その理解をモニタリングするために継続的に小レポートを課すなどを次年度は考えたい。

②アンケート項目２について

「つまらなかった・学ぶことがなかった授業」についての声は、学生中からはほとんど出てこなかった。数名の学生が、問題の答えを言って欲しかった、まとめをもう少し丁寧にして欲しかったといった記入をしているのみだった。

「教育を考える上で役に立った・学ぶことがあった授業」として評価が高かった授業は、伊那小学校と土堂小学校の比較とインタビュー記事の作成であった。５１人中２９人が、学びがあった授業として記入している。この授業は、①土堂小学校と伊那小学校のビデオ視聴、②土堂派と伊那派に分かれ、相互にインタビュー、③インタビューした際のやり取りを参考にインタビュー相手の意見を紹介する記事の作成（宿題）、④インタビュー記事の相互評価という流れで、計３回に渡り行ったものである。

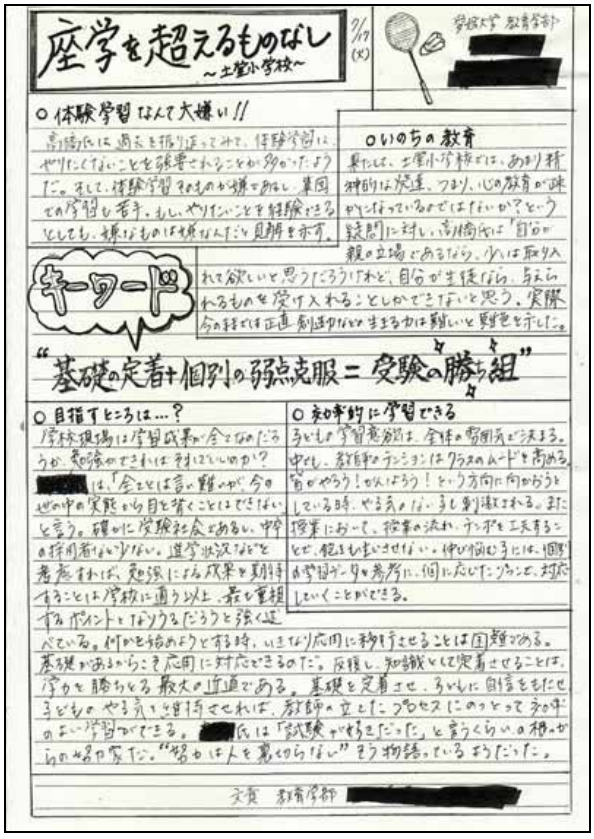
①のビデオ視聴では、反復練習で基礎学力の徹底錬磨を目指す土堂小学校と学ぶ意欲を大切にする伊那小学校を比較することを通して、学力低下問題や学びからの逃走という事態に対する考え方を創りあげてもらうことをねらった。②と③では、自分とは違う他者の意見に耳を貸し、自らの考え方を相対化することをねらった。

学生のアンケートには、例えば「あんなにも対極的な授業を見せられると、やはり教育にとって一番大切なことは何なのだろうと考えさせられるものがあり、とても勉強になりました」「極端すぎて面白い。考えれば考えるほど深みにはまった」「インタビューでは自分の意見ではなく、相手の方をまとめるということで学びが広がったし、みんなからいろいろ意見をもらったことで気づきが多かった」「他人の意見を聞き、それをインタビューにまとめるというのは、あらためて自己の意見を見つめ直すのに有意義だった」といった感想が書かれていた。

自分とは違う他者の意見に耳を貸し、自らの考え方を相対化する。この授業で目標としていたことは、ある程度達成できたように思う。しかしながら、学生たちが構築した考え、他者の意見の取り入れ方については、課題が残ったように思う。なぜならテストの答案には、「ドリル的な内容及び討論や共同作業などの学習をそれぞれの特徴を認識した上で授業の中にバランスよくとりいれていく」といった、いわゆる折衷案が多く綴ら

れていたからである。つまり、学生たちの多くは、土堂方式で基礎学力を定着させ、伊那方式で学ぶ意欲を育てるという考え方を構築したのだと考えられる。こうした折衷案は、実は安易な解答である。安易な折衷案にゆさぶりをかけ、再度考え直す機会を創りだすことは今後の課題である。

【学生の作成したインタビュー記事の例】



座学を超えるものなし
～土堂小学校～

7/17(火)

愛知大学 教育学部 [redacted]

○体験学習 なんて大嫌い!!

高橋氏は、過去を振り返ってみて、体験学習はやりたくないことを強要されることが多かったようだ。そして、体験学習そのものが嫌であるばかりでなく、集団での学習も苦手。もし、やりたいことを経験できるとしても、嫌なものは嫌なんだと見解を示す。

○いのちの教育

果たして、土堂小学校では、あまり積極的な成績、つまり、心の教育が疎かになっているのではないか?という疑問に対し、高橋氏は「自分が親の立場であるなら、少しは取り入れて欲しいと思うだろう!」と、自分が生徒なら、与えられるものを受け入れることしかできないと思う。実際今の話では正直、創造力などまるで力は難しいと難色を示した。

キーワード

"基礎の定着+個別の弱点克服=受験の勝ち組"

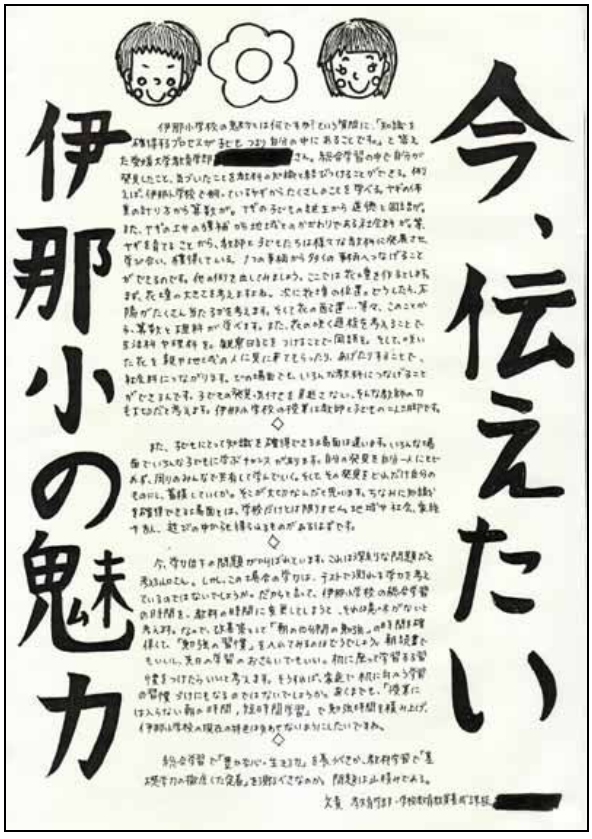
○目指すところは…?

学校現場は学習成果が命なのだろうが、卒業のできれば それでいいのか?
[redacted]は、「命ことは言い難いが、今の世の中の実態から目を背けることはできない」と言う。確かに受験社会である。中学の採用者は少ない。進学状況などを考慮すれば、勉強による成果を期待することは学校に通う以上、最も重視すべきポイントとなりうるだろうと強く述べている。何かを始めようとする時、いきなり応用に移行させることは困難である。基礎があるからこそ応用に対応できるのだ。反復し、知識として定着させることは、学力を勝ちとる最大の近道である。基礎を定着させ、子どもに自信をもたせ、子どものやる気を維持させれば、教師の立てたプロセスにのっとって効率のよい学習ができる。[redacted]氏は「試験がやるべきだった」と言うくらいの様子がうかがえる。"習わぬは人を惑わらない"という物語っているようだった。

○知的好奇心に学習できる

子どもの学習意欲は、全体の雰囲気で決まる。中でも、教師のテンションはクラスのムードを高める。「皆でやろう!やれるよう!」という方向に向かうとしている時、やる気のない子も刺激される。また授業において、授業の流れ、テンポを工夫することで、飽きも生じさせない。伸び悩む子には、個別の学習ペースも考慮に、個にたどりつくまで、対応していくことができる。

文責 教育学部 [redacted]



今、伝えたい
伊那小の魅力

伊那小学校の魅力は何でしょうか」という質問に「知識を獲得するプロセスが子どもたち、つまり教師の中にあることです。」と答えた愛知大学教育学部[redacted]さん。総合学習の中で自分が発見したこと、学びたいことを教材の知識を結びつけることができる。例えば、伊那小学校と朝、ていねいがたくさんのことを学べる。やがの手紙のやりとりから算数が。すぎの子どもの絵まきから歴史と国語が。また、すぎ&エゴの情報から地域づくりがわかる。また空間が算数を育てることから、教師と子どもたちは様々な教材に関連させ、学び合い、成長していく。ブラックボックスの事柄から多くの事柄へつなげることができるのです。他の例を出してみましょう。ここでは花の重さ作業をします。まず、花壇の大きさを考えます。次に教室の位置。どうしたら太陽がたくさん当たるかを考えます。そして花の配置…等々、このことから、算数と理科が学べます。また、花のいく過程を考えることで生活科や理科も。観察日記をつけることで国語も。そして、のこされた花を親やいもうとの人に見に来てもらったり、あげたりすることで、社会科にもつながります。とりの場合でも、いろんな教科につながることができるのです。子どもの発見・気付きを見逃さない。子ども教師の力もまた大切だと考えます。伊那小学校の授業は教師と子どもの一体感です。

◇

また、子どもにとって知識を獲得できる場面は通いの子、いろんな場面でいろんな子どもに学ぶチャンスがあります。自分の発見を仲間一人にとどまらず、周りのみんなと共有して学んでいく。そして、その発見をどんどん自分のものにし、蓄積していくのです。そこが大切なんだと思います。ちなみに知識・獲得できる場面とは、学校だけとは限りません。地域や社会、家族や友人、超えの中から社会様々なものがあるはずです。

◇

今、学力低下の問題が叫ばれています。これは深刻な問題だと考えます。しかし、この場合の学力は、テストや測りの学力を考えているのではないでしょうか。だから、伊那小学校の総合学習の時間を、教科の時間に変更してしまうと、その良さがなくなると考えます。なぜ、改善策として「朝の10分間の勉強」の時間確保して、「勉強の習慣」を入れてみるのはどうでしょう。新聞書かもいい。先の学習のおさらいでもいい。朝に限って学習する習慣をつけたらいいと考えます。もちろん、家庭や親にも大いに学習の習慣づけにもなるのではないでしょうか。あくまでも、「授業には入らない朝の時間」、「独の時間学習」で勉強時間を積み上げ、伊那小学校の現在の姿をゆるがせないようにしたいです。

◇

総合学習で「豊かな心・生きる力」を養うのか、教科学習で「基礎学力の徹底」を図るのか、どちらか、問題は山積みである。

文責 愛知教育大学 学校教育課程 [redacted]